

# 汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか？

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政治経済研究所 公開日: 2009-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 光芳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/1745">http://hdl.handle.net/10291/1745</a>

# 汪精衛は何故に「反蔣運動」から 蔣汪合作に転換したか？

土 屋 光 芳

## は じ め に

1926年3月の中山艦事件で最初の蔣汪合作が崩れて以来、1932年1月に再び蔣汪合作が実現するまでに汪精衛は都合2回にわたって反蔣大連合の指導者の役割を果たしている。

1回目の反蔣大連合は閻錫山と馮玉祥の武力を背景として1930年に北平で実現する。ここで、汪精衛は国民党の再建を一任され、拡大会議開催の運びとなり「約法」の起草にまで漕ぎ着ける。しかし、この大連合は張學良が蔣介石支持を決定したことによって瓦解してしまう。この1回目の反蔣大連合は如何なる意味をもっていたのであろうか。

この反蔣大連合を結成する上で中心的な役割を担ったのは改組派であった。改組派は陳公博等によって1928年に結成された当初、国民党が1924年の「改組の精神」に帰るように訴え、党の内側からの改革を目指した。しかし、党、政府、軍を一手に掌握しつつあった蔣介石の弾圧を受け、これを契機に、積極的な反蔣運動に乗り出していった。一方、改組派の結成から解散に至るまでの、汪精衛の改組派に対する係わり方に注目してみると、汪精衛が改組派の領袖就任を断ったにもかかわらず、改組派の事実上の理論的指導者の役割を果たしたばかりでなく、反蔣運動では先頭にも立っている。汪精衛は如何なる意味で改組派の指導者であったかについて筆

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

者は既に考察を加えた<sup>1)</sup>。結局のところ、次の2点が最も重要であったと考えられる。

第1に、国民党左派が正統な国民党を継承するものであるという認識で汪精衛と改組派は一致していたから、汪精衛が改組派のイデオログの役割を果たすことになったということである。当時、国民党が国共合作を停止し反共を実行したのに対応して、汪精衛はこの反共を理論的に正当化する国民革命論を展開した。汪精衛は国民革命と共産革命とを区別し、国民革命は中国を帝国主義と軍閥によって支配された状態から解放することを目標とするのに対して、共産革命は無産階級の独裁を目指すものであるとした。共産党が国共合作当初の約束を忘れて、いまや共産革命を志向するようになったから反共に踏み切ることになったと論じたのである。

第2に、汪精衛が改組派の栄枯盛衰にそれほど一喜一憂しなかったのは、党内の一派の指導者というよりも、一貫して国民党全体の指導者という自己認識に立って活動していたからだということである。それゆえ、汪は蒋介石の権力集中化が強まりつつある事態を国民党全体の危機として捉え、反蔣運動の先頭に立ったのである。そればかりでなく、北平拡大会議を境にして改組派が凋落の一途をたどり拡大会議そのものも失敗が避けられなくなったにもかかわらず、汪は約法制定に尽力し、これを機に蒋介石政権に対して孫文の三民主義理論体系にもとづく根本的な批判を加えたのである。

さて、2回目の反蔣大連合は1931年5月に広州非常会議として成立する。これは前年の反蔣大連合において汪精衛の起草した約法がきっかけとなって、南京政府側も独自の約法を制定するかどうかをめぐって蒋介石と胡漢民との間で対立が生じ、約法制定そのものに反対する胡漢民を蒋介石が幽閉したことに端を発する。蔣の胡幽閉に抗議して南京政府を退出した胡漢民派の元老たちが中心となって広州で反蔣大連合が再び実現し、汪精

## 汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

衛はここで成立した国民政府の指導者に迎えられるのである。にもかかわらず、その数カ月後の9月18日に柳条湖事件（九・一八事変）が起きると、汪精衛はこの反蔣大連合を離れ、蔣介石との和解への道を進み、その結果、1932年1月28日蔣汪合作政権が再び実現し、今回の反蔣大連合は崩壊する。

以上2回の反蔣大連合の結成と崩壊を通じて、反蔣大連合と蔣介石側との間で戦われた論争（戦闘ではない）を比較してみると、大きな違いに気が付かざるを得ない。それは第1回目のおきの特徴だったイデオロギー論争の色彩が第2回目の時には薄れていることである。

第1回目の反蔣大連合の際は、国民党の反共化に伴って国民党内に三民主義の再解釈をめぐって理論闘争が戦われ、左派の汪精衛と改組派は、蔣介石ら右派による三民主義の独裁的な運用に反対して、その民主的な運用を目指す方針を打ち出し、それを約法制定という形で実際に示していることが重要であろう。

第2回目の反蔣大連合では、改組派が第1回反蔣大連合の末期に既に解散していたことから明白なように、国民党の左派と右派のイデオロギー対立の激しさも既に峠を越し、裸の権力の生々しい対立が突出し、中国における古典的な文人と軍人との対立が尖鋭化していったことである。

こうした第1回目と第2回目それぞれの反蔣大連合の相違に留意しながら、2回目の反蔣大連合を機に、汪精衛は何故に「反蔣運動」を止めて「蔣汪合作」に方針転換を決断するのかを、本稿では考察するつもりである。

以下、次の順序で論を進めていこう。

[1] では、第2回反蔣大連合がどのように実現して広州非常会議開催の運びとなり、広州国民政府が成立するのかを検討しなければならない。この広州国民政府がいかなる諸勢力によって構成されていたのか、この政府

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

で汪精衛がどのような役割を果たすように期待され、実際、どの程度自由に活動する余地があったのが考察の中心となるであろう。

〔2〕では、九・一八事変が蒋介石と汪精衛にどのような影響を及ぼして蔣汪合作の実現となるかが検討の対象となるであろう。ここでは広州国民政府において汪精衛がどのような立場に置かれていたのかを明確にしながら、汪精衛が何時、何故に蒋介石との合作を決意したのかに考察の焦点を絞りたいと考える。

むすびでは、文人としての汪精衛の政治指導の特質の一端について考察したいと考える。

注

- 1) 拙稿「汪精衛は改組派の指導者か?」、明治大学『政経論叢』第60巻、第5・6号、1992年、93～132ページ。

## 〔1〕

1931年5月27日に再び反蔣大連合が実現、広州で非常会議が開催され、その結果、広州国民政府の成立をみる。前回の反蔣大連合が失敗して1年も経たないうちに2回目の反蔣大連合が何故に実現したのかがまず検討の対象になるであろう。

それでは、広州非常会議がどのようにして実現の運びとなるか、この経緯を概略することしよう。

1930年の北平拡大会議が結局のところ失敗に終わった後、汪精衛は香港に戻っていた。汪は太原を離れる直前の10月27日、改めて約法の必要性を訴え、1928年に全国統一が実現したのにもかかわらず、戦争が絶えないのは、人民の自由と権利を保障する約法がいまだに制定されていないからだ  
と主張したのである<sup>1)</sup>。この約法問題こそ1928年以来続いていた蒋介石と

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

胡漢民との合作にクサビを打ち込むことになるのである<sup>2)</sup>。

蒋介石は最後の「中原戦争」が勝利する見込みのついた1930年10月3日、前線から国民党中央に向けて四全大会を開催し、国民会議の招集と憲法制定の準備をし、それと同時に、憲法制定以前に必要な訓政期「約法」の起草をせよという通電を発した。実際、汪に負けず劣らず先見の明のある蒋介石は巧みに汪の提案を取り上げたわけである<sup>3)</sup>。

しかし、立法院長、胡漢民は、約法起草の準備をしないどころか、約法制定に真っ向から反対し続けたのである。胡漢民によれば、国民会議で約法を制定することは孫文遺囑に反するというのであった。なぜなら、国民会議は国民の一部分（職業団体）の代表であって、民主的な選挙によって選ばれた機関ではないので、約法制定のように国民全体の代表のなすべき業務をする資格がないからだと主張したのである。もっとも、後に胡漢民が自伝に記したところでは、約法制定に反対した真意は蒋介石の総統就任を阻止することにあったといっている<sup>4)</sup>。

胡漢民の真意はさて置くとして、蒋介石は手を変え品を変え胡の説得に努めたものの、無駄なことが分かり、1931年2月28日遂に胡を辞職させ、湯山に幽閉する。こうして3月2日に、約法起草は強行されるのである。しかし、胡幽閉によって蔣胡合作にピリオドが打たれたことがまもなく明らかとなる。

蒋介石のこの強行措置に対して、胡を支持する広東派の中央監察委員、古應芬は職を辞して、4月30日にはその他3名（鄧澤如、林森、蕭佛成）との連名で「弾劾蔣中正電」を発表した<sup>5)</sup>。それ以後、かれら広東派の政府委員は続々と南京を離れ、広州に集まっていった。また、この動きと呼応して第八路軍総指揮の陳齊業も広東で反蔣の旗幟を鮮明にし、南京と広東とが相対峙する様相を呈してきたのである。

汪精衛は3月初め孫科を介して胡漢民からの救出要請を受けている。胡

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

は反蔣運動を起こして救出してもらいたいと考えていたようである<sup>67</sup>。これを受けて、汪は、3月14日香港で「爲胡漢民被囚重要宣言」を發表、各派が結束して蔣介石を討つよう呼びかけるのである<sup>77</sup>。これによって第2回反蔣大連合の第1目標が何はさておき胡漢民救出にあったことが示唆されるであろう。

5月2日に汪精衛は、広東が反蔣に決起したので広西も協力して欲しいと李宗仁らに電報を打ち、ここで初めて「非常會議」を招集して解決しようという提案を行っている<sup>87</sup>。その後、24日には汪精衛と孫科の二人は広州に行き、陳齊棠宅で国民党中央執監委員會非常會議を招集することを決定、27日に開かれたこの非常會議の決定によって広州国民政府が成立する運びとなる。こうして南京と対立する新たな政府が広州に誕生するのである。

ところで、非常會議の開催される前後から9月18日の柳条湖事件勃発に至るまで、汪精衛は今回の反蔣運動の力点をどこに置いていたのであろうか。この時期、汪精衛の発した電報や新聞社とのインタビュー等の内容を検討すると次のような特徴が浮かび上がる。

第1に、それまで一貫して国民党左派の正統性（「党統」）に固執してきたような改組派的色彩を無くして、民主政治の実現という目標を全面に押し出して全党派が一致協力するように説いていることである。特に「如何聯合起來」（1931年5月15日）を見ると汪は次のような論を展開している<sup>89</sup>。

すなわち、「理論」の違いから党派が生まれ、また複数の党派ができるから党が分裂する。とすれば、理論を一致させれば、派閥も生まれぬし党も分裂しないはずである。それゆえ、「討蔣の意義を民主と独裁の闘争であると認識すれば、全ての同志は必然的に連合できる」というのである。このようにして汪は反蔣の「理論」を独裁に対する民主主義の戦いと

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

して定式化したのである。

第2に、党が一致団結するためには現存する党内の派閥（「小組織」）を解消するだけでなく、派閥の観念をも完全に打破しなければならないと説いていることである。したがって派閥を作ることを党紀違反にしようとするのである<sup>10)</sup>。この主張は汪精衛自身がこれまで主観的には一派閥の指導者としてではなく党全体の指導者として活動してきたという自己認識において一貫していることはいうまでもないであろう。

第3に、軍事行動は決して最終的な解決にはならないので、従来から武力統一よりも和平統一を優先していると言っていることである。しかるに蔣介石はこれまで和平の名を借りてその実、武力に訴えてきたと批判し、さらに汪精衛の側は一貫して和平を主張してきたにもかかわらず、蔣介石が攻撃してくるから戦わざるを得なかったのだと言っている<sup>11)</sup>。

要約すれば、汪精衛は党内の派閥を解消し一致協力して民主政治を実現するという目的を掲げて反蔣勢力の結集をはかったのである。広州国民政府が発足するとき「由建設而图統一、依均权以求共治」をそのスローガンとして掲げている。雷鳴はその『汪精卫先生传』（1945年）で、このスローガンの前半部を蔣介石の武力統一論の否定であり、後半部を独裁の否定であると解説していたが、まさにその通りだったのである<sup>12)</sup>。

しかしながら、今回の反蔣大連合には汪精衛のこうした主張の実行を著しく妨げる諸要因があったのである。

それらの要因のうちでもっとも重要なものは広州非常会議に結集した派閥の勢力分布に求めることができる。すなわち、広州非常会議は汪派以外にも、広東派、元老派、西山会議派、孫科派といった派閥から構成されていたが、中でも汪精衛を招いた広東派と元老派の政治的性格に問題があったと言えるのである<sup>13)</sup>。

第1に軍人の陳齊棠は広州非常会議のいわばスポンサー的存在であった



汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

が、かれは汪精衛たちにはなく、元老派に共感を寄せていた。それゆえ、陳齊棠が汪を必要としたのは、中央軍と対抗する上で足りない軍事力を汪の動員しうる軍事力（張發奎と李宗仁）で埋め合わせるつもりだったばかりでなく、国民党におけるキャリアからしても汪を頭に戴いて蔣介石と対抗するしかないという計算からでもあった。

第2に陳齊棠を守り立てていたのが南京政府を退出してきた古應芬等の元老派であったから、なおさら元老派は広州政府において汪派以上に影響力を持っていたと見てよいことであろう。しかも、この元老派と陳齊棠とが結束して汪精衛の手足ともいべき旧改組派の主要メンバーの非常会議参加を拒んだのである。

第3の西山会議派からは鄒魯と許崇智の二人の指導者が参加していた。特に北平拡大会議以来、鄒魯と汪精衛との協力関係は良好であったが、許崇智はかつて広東から追放されたとき以来の不信感から汪との協力を拒んだのである。

第4に孫科は非常会議開催に向けて胡漢民と汪精衛との熱心な仲介役を努めてきたが、いざ非常会議が開かれてみれば陳齊棠におさえられて何もできなかったことである。

こうして第2回反蔣大連合において陳齊棠らは「汪精衛は招いてもその取り巻きは断る」といった態度で汪を扱ったのである。この対応を陳齊棠らは「去皮存骨」と言っていたようである。「皮」とは旧改組派の主要なリーダーたち（陳公博、顧孟餘）を、「骨」とは汪精衛をそれぞれ指していた<sup>14)</sup>。これに対して汪精衛は蔣介石の「大獨裁」に対して、陳齊棠を「小獨裁」に擬して、陳齊棠は共に凶るに足らざる人物と早くから見限っていたようである<sup>15)</sup>。

もう一つ汪精衛の活動を制約する要因として無視できないと考えられるのは、この非常会議のときには、北平拡大会議のときのような市民による

### 汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

迎汪運動の盛り上がりがあったという記事がみられないばかりでなく、多くの軍人たちは既に内戦（国民党の内訌をさす）に飽き飽きしていたのではないかと推定されることである。

既に述べたように、この時期の汪精衛はその講演でも和平を主としており、蒋介石からの戦争を受けて立っているのだと言っていたが、これも人びとの厭戦気分を汪が敏感に察知していた証拠と見てよいのではないか。また、そればかりでなく、広東派の反蔣姿勢が明確になるや否や広州を離れた広東省主席、陳銘樞もまたその回想で自分の部下は内戦に反対していたと言っていることに注目すべきであろう<sup>16)</sup>。ちなみに陳自身はその後、広東と南京の間の仲介に奔走し、その功績で蒋介石が1931年12月に辞職した後、代理行政院長に就任、次いで孫科行政院長実現のときは行政院副院長に任ぜられている。

このように第2回反蔣大連合は、北平拡大会議の時とは異なって速やかに広州国民政府の樹立という成果を上げたにもかかわらず、党務は汪精衛よりも元老派の手に委ねられる傾向にあり、まして汪の掲げた民主政治の理想も、政府の軍事的背景をなす広東派の政治的性格が独裁と変わりがなかったため、机上の空論にすぎなかったと言ってもよい。つまり汪は蒋介石と対抗する上での新しい国民政府の象徴もしくは飾り物としての役を担う以上のことは期待されなかったのである。そればかりではなく、広東そのものが既に革命はもとより内戦をも嫌う情勢であると判断されたのである。してみれば、第2回反蔣大連合の共通目標はぎりぎり胡漢民救出ぐらいなものしか残らないというありさまだったといえるであろう。

#### 注

- 1) 「1930年10月27日、汪精衛在太原扩大会议纪念周上报告约法问题」(查建瑜編『国民党改组派资料选编』湖南人民出版社 1986年)、435～439ページ。
- 2) 以下、胡漢民についての記述は主に、張同新『国民党新军阀混战史略』(黑龙江人民出版社 1982年 411～418ページ)と周聿哉・陳紅民『胡漢民評傳』(廣

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

東人民出版社 1989年 213～237ページ)による。

- 3) 董顯光『蔣總統傳(一)』(台北 中華文化出版事業委員會 1957年五版 158ページ)。また、張同新によれば蔣介石は、約法のなかで大統領(「総統」)制導入を盛り込んで、国民会議の選挙を通じて「総統」に就任するという筋書きを立てていたとしている(張同新前掲書 406ページ)。
- 4) 胡漢民は、さらに「进一步说, 你操纵一个国民会议, 通过约法, 再选举你做总统……」(「胡汉民自传续篇」『近代史資料』第52号 1983年11月 56ページ)と言っている。
- 5) 中國青年軍人社編『反蔣運動史』, 中國青年軍人社, 1934年, 289～293ページ。
- 6) 胡漢民は見舞いにきた孫科派の医師に「一定要在两广建立反蔣局面救他(胡のこと, 引用者注), 甚至不惜与汪派合作」と頼んだという(周一志「"非常会议" 前后」中国人民政治協商会會議全国委員会文史資料研究委員会編『文史資料選輯』第9輯 1960年 85ページ)。
- 7) 中國青年軍人社前掲編 287～288ページ。
- 8) 查建瑜前掲編所収「1931年5月2日, 汪精卫复李宗仁, 白崇禧, 张发奎冬电」, 452～453ページ。
- 9) 中國青年軍人社前掲編 320～321ページ。
- 10) 查建瑜前掲編所収「1931年6月25日, 汪精卫复改组同志会总通讯处筹备委员会公开信, 重申取消派別组织」, 462～463ページ。
- 11) 中國青年軍人社前掲編所収, 「中央軍政聯合紀念週報告」 449～453ページ。
- 12) 查建瑜前掲編所収, 463～464ページ。なお蔡德金(『汪精卫評傳』四川人民出版社 1987年)はこのスローガンから蔣介石との合作の条件を提示したものと読んでいるが、いささか深読みの感を免れないであろう(192～193ページ)。
- 13) So Wai-chor(蘇維初), *the Kuomintang Left in the National Revolution, 1924-1931*, Hong Kong: Oxford University Press, 1991, pp. 192～195.
- 14) 李鐸・汪瑞炯・趙令揚編註『苦笑錄: 陳公博回憶 1925至1936』(香港大學亞州中心 1979年), 265ページ。
- 15) 同じく広州政府に参加した広州市長, 程天固(『程天固回憶錄』香港 龍門書店1978年)によれば, 汪精衛は「如果我要受小獨裁之氣, 我何不受大獨裁之氣」と言って鬱憤を晴らしていたという(235ページ)。
- 16) 陳銘樞は, 江西で剿共戦の任に就いていた部下(蔣光鼐ら)に反蔣の如何を問う電報を打ったところ, 「拥护統一, 反对内战」という返事が返ってきたという。これを見て陳銘樞自身は広東を離れる決心をし, 反蔣を明確にした陳齊棠とのトラブルを回避しようとしたという(陳銘樞「"宁粤合作" 亲历記」前掲『文史資料選輯』第9輯 1960年 50ページ)。

〔 2 〕

さて、南京政府と広州政府との間でまさに戦端が開かれようとしたとき、突然、九・一八事変勃発の知らせが飛び込んでくるのである。1931年9月18日に起きたこの事件が蔣汪合作にどのような影響を及ぼすことになったのであろうか。

まず第1に、汪精衛よりも蒋介石にとってのほうが九・一八事変は深刻な出来事だったことを指摘できるであろう。なぜなら、南京政府は国際的な正統性を認められた政権として、また地理的な位置関係からしても、いずれ日本と直接に戦闘を交えざるを得なかったばかりでなく、その対応の消極性によって国民の批判の矢面に立たされることになったからである。

それでは、南京政府は九・一八事変に対してどのように対応したのであろうか。

簡単に言えば、九・一八事変が起きても蒋介石は張學良に不抵抗と撤退を命じ、その後、国際連盟に提訴しただけであった。なぜなら、蒋介石は九・一八事変の起きる以前の7月23日、「安内攘外」の基本方針を発表、国内秩序の安定を第一とし、対外関係は後回しにする決定をしていたからである<sup>1)</sup>。実際、この決定に従って蒋介石は7月、自ら先頭に立って共産党の掃討戦（「第3次剿共戦」）に出陣すると同時に、新たに独立を宣言した広州政府の打倒に向けての戦いを始めようとしていた。まさにその矢先に九・一八事変が起きたわけで、日本と事を構える余裕などありはしなかったのである。

一方、南京政府のこうした対日政策に不満な学生たちは、外交部長の王正廷を殴打し、9月30日に王を辞職に追い込んでいる。国民の批判の刃が自らに向けられようとしていた状況を察知して蒋介石が何よりも真っ先に

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

広州政府との妥協への道を真剣に求めたとしても当然のことであったと考えられる。

蒋介石は、非公式のルートとして宋子文を派遣して汪派の抱き込みを計る一方<sup>2)</sup>、張繼、蔡元培、陳銘樞の3人を香港に派遣、かれらはここで広東側の代表者（汪精衛、孫科、李文範）と会い、9月28日に寧粵合同（寧とは南京のこと、粵とは広東のことである）に向けての正式な協議を開始している。

蒋介石は続いて10月14日に胡漢民を8カ月以上に及ぶ監禁から解き放っている。胡はその足で上海に行き、15日、広州に向けて電報を打ち、国難に対処するために党内は堅く団結せよと呼びかけている<sup>3)</sup>。これで第2回反蔣大連合の最低限の目標は達成されたことに注意しておこう。

こうして、10月22日には上海において胡漢民、汪精衛、蒋介石の国民党三巨頭会談が実現するのである<sup>4)</sup>。かれらが一堂に会するのは1925年以来このかた初めてのことであった。この日、蒋介石は胡と汪の2人が率先して南京と広東との平和裡な統一を準備するために会議（「和平会議」）を開催するよう要請する。翌23日には、「共赴国難」として外交方針の一致と具体的な行動が必要であると相互に確認しあったばかりでなく、それ以上に興味深いことには、国民政府の再建案として汪があらまし次のような提案をし、それについて3人の間で基本的な合意ができるのである<sup>5)</sup>。

第1に、国民政府主席はワイマール・ドイツの大統領にならって、高德の士を当て、現役の軍人がその職に就くことができないものとするとともに、主席にかわって行政院が政治責任を負うこととする。

第2に、陸海空軍総司令は廃止する。

第3に、党務は一期、二期、三期中央委員が会議を招集し、四全大会を開催して過去の行き違いを一掃する。

この政府再建案が主席への権力集中を阻止し、そのシンボル化をはかっ

### 汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

ている点でより民主的な政府をめざすものとなっているばかりでなく、総司令廃止の項目も入っていることからすれば蒋介石が著しく譲歩していることもまた一目瞭然であると考えられる。独裁防止の第一歩となりうる制度改革に向けてこうした譲歩が得られれば、蒋介石の下野に汪精衛が固執する必要もなくなっていたことも理解できるといえよう<sup>67</sup>。ついでに言えば、この頃、汪精衛は上海で盛んに談話を発表しているが、その内容もまた独裁への歯止めとなるように政府の民主化を求めることに力点を置いていたのである<sup>70</sup>。

ところで、この三者会談は胡漢民、蒋介石、汪精衛のそれぞれにとって如何なる意味を持っていたのであろうか。

胡漢民は、この時、蒋介石に下野を約束させるとともに、国民党および国民政府の改革をも要求したようである<sup>69</sup>。前者の蒋介石下野の約束については結局のところ不確かなままに終わっている。他方、政府の機構改革については、汪精衛の提案に自分と共通する意図を読み取ってであろうか、汪提案に賛成の意思を表明したのである。

蒋介石にとっては、広州国民政府の一貫した要求であった胡漢民釈放を実行し、少なくとも広州との全面的対決を避けることができたことが重要である。とはいえ、まだ自らの下野要求にどう対処していくかという懸案も残っていたし、この三者会談の場所では一応、汪精衛と胡漢民の両「先輩」の希望を尊重し、党と政府の制度改革の要求は呑まざるを得なかったと考えられる。蒋介石の後年の回想録から推測すると、蒋介石にとってこの時の譲歩は屈辱以外の何物でもなかったようにも察せられる<sup>91</sup>。

汪精衛にとってこの会談は少なくとも次の2つの大きな意味があったと考えられる。

その一つは胡漢民釈放が実現したことによって、第2次反蔣大連合の最低限の目的がこれで達成され、その意味で汪精衛は広東派に対する義理を

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

果たすと同時に、胡漢民に対しても友情の証しを示すことができたことである。

もう一つはこの会談で汪精衛は蒋介石の独裁化の傾向に対して制度上の歯止めとなる相当の譲歩を蒋介石から引き出すことに成功したと考えられることである。これで2回に及ぶ反蔣大連合において汪精衛が一貫して要求してきた政府の民主化のための制度改革はその突破口が開かれたといえるのである。とすれば、汪精衛にとって今後は蔣汪合作の条件を詰めるだけになっていたといってよいのではなからうか。

さて、三巨頭会談を受けて、10月27日から11月7日まで上海で和平会議が開かれるのである。ここで寧粵合同のための具体的な手続きが決められる<sup>10)</sup>。その手続きは次の4点からなる。

第1に南京と広州がそれぞれ四全大会を開いて国民党の統一を通电する。

第2に南京と広州の各四全大会に出された全ての提案は第四期一中全会で処理する。

第3に南京と広州の双方が中央執監委員と候補委員の選出方法を協議する。

第4に第四期一中全会で国民政府組織法を修正し国民政府を改組する。

この和平会議でもまた汪精衛は蒋介石の下野を明確に打ち出さなかったもので、後に、広州政府内ではこの点に非難が集中し、そのためでもあろうか、汪精衛は広州政府を退出することになる<sup>11)</sup>。

ところで、上海の和平会議で決まった寧粵合併の手順にしたがって、南京の四全大会は11月12日から、広州の四全大会は18日からそれぞれ開催されている。

南京の四全大会では汪精衛等の旧改組派メンバーの党籍回復が決定されるとともに、蒋介石が公式の席で自らの非を認めるという発言をしてい

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

る<sup>12)</sup>。

他方、広州で開かれた四全大会に胡漢民と汪精衛は出席しなかったし、それどころか、同大会において陳齊棠らは上海和平会議の決議の無効を主張する動議を提出し、汪と孫科を、非常会議を蒋介石に売り渡したとして非難、かれらの糾弾に終始するのである。そのため、11月23日以降、汪派のメンバーは上海和平会議の合意事項を遵守しなければ再び内戦になるという危惧を表明して、続々と大会を途中で退出し香港に去ってしまうのである。その後、汪派のメンバーが欠席のままで胡漢民の指導のもとに四全大会は続けられ、蒋介石の下野と南京政府の改組を要求して閉幕するのである。ここで重要なことは改めて蒋介石の下野を要求するという通電を胡漢民が発していることであろう。

これによって、胡、蔣、汪の国民党三巨頭の協力体制は実現できそうもないこと、少なくとも胡漢民の協力は得られないことが明らかになったのである。それにしても、胡漢民がこれほどまでに蒋介石の下野にこだわったのは何故であろうか。その理由と考えられるのは、胡がもともと大義よりも私怨にこだわる性格だったからなのか、あるいは11月29日に胡幽閉の反対運動を最初に起こした恩人、古應芬の病死に接し、怒りを新たにしていたことにもよるのではなかろうか<sup>13)</sup>。

一方、香港を後にし上海に出た汪派は12月4日に上海の「大世界」で別個に四全大会を開いて、10名の執監委員を選出している<sup>14)</sup>。蔣汪合作ではなく汪胡合作を主張していた陳公博はこれを評して、その手際良さに驚嘆の声をあげながらも先例にしないようにしなければならないと述べている<sup>15)</sup>。おそらく陳公博は同じ上海でかつて広東を追放された西山会議派が同じように「非合法的」二全大会を開いたことに思いをいたしたのではなかろうか。改組派のリーダーとして陳の否認したものがそれだったからである。



### 汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

12月15日に、結局、蔣介石は下野し、ようやく南京、広州、上海相互の間で妥協が成立する。12月28日、それぞれの四全大会で選出された執監委員が集まって四期一中全会が開かれ、公約の通りに政府組織の改革も実現する。これまでの主席に代わって最高権力者となる行政院長には孫科が就任し、一種の責任内閣制がスタートするのである。もちろんこの孫科政権を守り立てたのは広東派の指導者たちだった。もっとも胡漢民は広州に引きこもったまま出てこなかったのである。

ところで、汪精衛はこの四期一中全会を病と称して欠席<sup>16)</sup>、その一方また、蔣介石は辞職を余儀なくさせた孫科政権への協力を拒み通したのである。遂に、孫科は、翌32年1月24日には結局、職を放り出してしまうのである。その1週間ほど前の1932年1月16日、汪精衛は蔣介石の求めに応じて杭州に赴き、18日、蔣、汪、孫科、張繼、張靜江の5人が西湖の南にある高峰山の麓、烟霞洞で秘密会議を開き、そこで蔣汪合作が再び実現する運びとなるのである。

1月28日、汪精衛は行政院長に就任し、蔣介石は軍事委員会委員長兼軍事参謀部参謀長に任命されて、蔣汪合作政権がスタートする。ここでは政府は汪精衛が、軍事は蔣介石がそれぞれ担当し、また、党は汪と蔣が共同で責任を負うことになっていた。

ところで、反蔣運動のリーダーだった汪精衛が何時、何故に蔣介石との妥協へと政治的立場を変えたのか、また、この変更をどのように正当化したのか、考察しておこう。

まず、汪精衛は何時、蔣介石との合作を決意したのであろうか。それは、九・一八事変後、蔡元培、張繼、陳銘樞が蔣介石の親書を携えて汪精衛と会ったときのことと考えられる<sup>17)</sup>。

次に、汪精衛は何故、蔣介石と再び合作する気になったか。その手がかかりとして九・一八事変の前後で汪と蔣を取り巻く状況がどのように変化し

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

たかを考えてみよう。

九・一八事変の起きる前、汪精衛はどのような状況におかれていたのだろうか。汪精衛は、広州非常会議を開催し広州国民政府を樹立、独裁に対する民主主義の戦いとして反蔣を訴えてきたものの、元老派と「小獨裁」の支配する広州では汪が自由に活動できる見込みも、また民衆の支持も得られないことがはっきりとしてきた。それゆえ、今回の反蔣大連合の共通目的はせいぜい胡漢民救出ぐらいしかないという状況だったと考えられる。

ところが九・一八事変が起きた後、それまで蒋介石と汪精衛の置かれていた状況が一変するのである。特に蒋介石のこれまでの強硬な姿勢が一変してしまったことに注目しなければならないであろう。

一方の蒋介石の側にとって、日本軍の東三省制圧に国民世論が激昂し、対日不抵抗に終始する国民政府に対する批判が強まる中で、もはや党の分裂が許される状況ではないことが明白となっていたことが重要であろう。その場合、共産党よりも広州政府との妥協の方が実現する可能性が高いとすれば、広州政府への大幅な譲歩もまたやむを得ないといった判断が蒋介石にあったのではなかろうか。ただし、この時の譲歩のぎりぎりの線は胡漢民の釈放と行政院長のポストの明け渡しであって、自らの下野は論外であったことは重要であろう。それゆえ蒋介石は自らの下野に柔軟な姿勢を示した汪精衛との合作を目指す方向に傾いていったと考えられる<sup>18)</sup>。

他方、汪精衛の側としては、九・一八事変で国内よりも国外の問題を優先せざるを得なくなったという状況認識では蒋介石とおそらく同じものであったと考えられる。なぜなら、汪精衛はそれまでの反蔣運動の間も終始一貫して全党の指導者を自認していたことに変わりはなかったからである。いまや九・一八事変をきっかけに蒋介石の態度が軟化し、その結果、真先に胡漢民釈放が実現したことは重要であった。なぜならこれで第2回反

## 汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

蔣大連合の最低目標は達成されたわけで、いわば、広州政府への義理も果たし、また胡漢民への友情にも報いることができたと考えたであろうことは想像に難くない。

それでは汪精衛をして蔣介石との妥協に向かわせた根本的な理由は何だったのか。

第1に、九・一八事変以降の政治的基本方針が蔣介石の「安内攘外」と一致してきたことに気が付いたことであろう。すなわち、いずれの日か対日戦争が避けられなくなってきたとすれば、速やかに国内統一＝「剿共戦」を実施しなければならない。この必要から汪精衛が政治＝外交を、蔣介石が軍事を担当するという分業が可能になったということである。

それ以上に汪精衛にとって重要だったであろうことは、第2に、国民政府の民主的な制度改革について蔣介石からの譲歩が得られたと判断できたことだったと考えられる。この制度改革こそ改組派にしても、汪精衛にしても一貫して主張し、実際に蔣介石と戦ってきた根本的な理由のはずだったからである。また、党については蔣と汪がともに責任を負うという合意が本当に実行されたとすれば、蔣介石の独裁化を防止できるはずだと汪は考えたのであろう。

以上のように考えれば、汪精衛が蔣介石との合作を正当化した論理は次のようなものとなるであろう。

反蔣大連合の一貫した目的は独裁反対と民主政治の実現であると汪は主張してきた。それゆえ、10月22日、胡漢民、蔣介石、汪精衛の三者会談で国民政府のより民主的な制度改革（すなわち、主席のシンボル化、行政院長の責任内閣制、行政院長に軍人が就任しない等）について蔣介石の譲歩が得られ<sup>19)</sup>、実際にこれが実現すれば、反蔣運動の目的は達したと考えるべきである。もとより「反蔣」とは蔣介石その人の排除というのではなく、蔣介石の政治姿勢を問題にしていたものであり、蔣介石の譲歩が得ら

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

れたいま、蔣介石との妥協は当然のことである、といった正当化の論理であったと考えられる。

それでは、汪精衛のこうした蔣汪合作の正当化の論理にはどれだけの説得力があったといえるのであろうか。これは、汪精衛の政治家としての節操に係わってくる問題であらう。

一見したところ汪精衛は権力欲の旺盛な変節漢であるといった評価は当たっていないこともないようである。しかし、この時期の汪精衛は単なる反蔣運動のデマゴグに留まっていたのではなく、反蔣運動は民主政治の要求であると規定し、実際に制度改革の具体的プランを提示していることを忘れてはならない。確かに汪精衛自身、国民党領袖としてのカムバックに強い意欲があり、同時にまた自派の生き残りを目指していたのは否定できないかもしれない<sup>20)</sup>。それにもかかわらず、汪精衛は国民党と国民政府をどのようにすれば、より民主的な制度に改革できるかという問題意識を持っていたことは疑いないところであらう。その意味で国民党の三民主義を蔣介石のように権威主義的に解釈するのではなく、はたまた陳公博のように共産主義的文脈で捉えようとするのではなく、ヨーロッパ流の民主政治に向けて党および政府の組織改革を企てたと評価して良いのではなかろうか。汪精衛のこうした政治的実験は、その後、対日外交の処理に追われ、その責任を一手に引き受ける中で銃弾に倒れ、辞職を余儀なくされるというように悲劇的な結末を迎えることになるのである。

#### 注

- 1) 古屋奎二編著（中央日報記）『蔣總統秘録 第七冊』、台湾、中央日報社、1976年、185～186ページ。
- 2) 蔣介石は宋子文を派遣し「广东要汪先生是只要骨头，不要皮，我們南京要汪先生是連骨帶皮一起要」といわせたという（周一志「“非常会议”前后」前掲『文史資料選輯』所収 88ページ）。一方、ヨーロッパから10月1日に帰国した陳公博は5日、香港で汪精衛と会い、上海に行って宋子文と折衝するよう命

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

じられる。しかし陳は蔣汪合作に反対し、胡漢民との合作を説き、汪の指示には従わなかった（李鏞・汪瑞炯・趙令揚前掲編註書 266ページ）。ここに陳公博の硬骨漢ぶりが良く出ている。

- 3) 蔣永敬『胡漢民先生年譜』、台北、中央文物供應社、1978年、509～510ページ。
- 4) 蔡德金前掲書、194ページ。張同新前掲書、457ページ。
- 5) 查建瑜前掲編「1981年10月22日、汪精卫起草会谈纪要」、482～483ページ。  
なお「行政院は政治責任を負う」は『大公報』（1931年10月24日）の記事にみられる。
- 6) 查建瑜前掲編所収「雷鳴『汪精卫先生传』对“汪精卫并不坚持蔣氏下野”的记载」、484ページ。
- 7) 張同新によれば、その内容は以下の4点に要約できる（張同新前掲書 457～458ページ）。第1に、一期、二期、三期中央委員が協力して四全大会を開くこと。第2に、党がこれまで分裂した第一の原因は集権と分権の対立に帰することができるので、今後、中央と地方の権限をはっきりさせる必要があること。第3に、約法を制定し政府と人民との関係を明記すること。第4に、現役の軍人が政治に関与できないようにすること。
- 8) 周聿峇・陣紅民前掲書、235～236ページ。
- 9) 蔣介石の晩年の回想録、古屋奎二編著（中央日報訳）『蔣總統秘録 第八冊』（台北、中央日報社、1976年）にはこの三巨頭会谈についての記載がないし、それどころか、上海和平会議で広東側の提起した制度改革要求は、明らかに「反對蔣主席」を目的とし、「統一」を口実とする勢力拡大の企てとしてしか見ていないからである（115ページ）。
- 10) 查建瑜前掲編所収「1931年11月7日、宁粤上海和会全体代表通电」、491ページ。
- 11) 以下、汪精衛は蔣介石下野の通電が出ないことについて次のように説明している。

「1931年10月25日、汪精卫为蔣不发下野电多方辯解」（『大公報』10月26日 查建瑜前掲編所収 485ページ）の説明。蔣介石は9月はじめ広東に人を寄越し下野してよいといってきた。その後、蔡元培、張繼、陳銘樞がきて、蔣介石の下野と広東政府取り消し電報の草稿をつくった。この電報の主旨は新政府ができたなら蔣が辞職し、広東政府も解消するという内容であるが、すぐにそうするというものではない。また、いつこれらの電報を発表するかはもう一度協議して決める。

「11月9日、汪精卫致各同志书，对蔣不发下野电再加解释」查建瑜前掲編所

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

取 494～495ページ)の説明。いまや、全てを軍事で解決するのではなく政治で解決することが重要である。四期一中全会は国民政府組織法を改正し、政府を改組したが、これは民主主義への第一歩と考える。さらに、蔣介石が下野するか留任するかは和平会議の多数決で決めればよい。まさに軍事的解決よりも政治的解決のほうが安上がりである。

- 12) 張同新前掲書によれば蔣介石は「……故对党内同志，对总理，我承认是有罪的人，而今忏悔，愿牺牲一切，贡献于党国，赎我罪恶。」(467ページ)と言っている。
- 13) 沈雲龍『民國史事與人物論叢』，台北，傳記文學出版社，1981年，321ページ。いずれにせよ，沈雲龍の胡漢民評，「念念不忘清理舊怨，胡之偏狹個性，不能相忍爲國，於茲可見」(322ページ)は的確であると思う。
- 14) 中國青年軍人社前掲編著によれば，広州四全大会を潰すために次のような密約が蔣と汪との間にかわされていたという。それは，「第一條，由汪派退出廣州大會，來滬開會。第二條，如廣州方面堅持推翻和議決案到底，則決由汪派繼承粵方名義繼續與南京蔣逆合作。蔣氏並許以原在滬和會所決定分配粵方之二十四名額的中央委員，歸汪派選出。第三條，如廣州大會經胡先生返粵指導，轉圜成功，則汪派在滬所選出之中央委員，由南京蔣方保障，允許至少承認十名。第四條，如四屆一中全會開會期間，汪派如誠意繼續援助蔣氏。則蔣氏允許與汪派瓜分南京反動政權；許以至少一院（行政院）兩部一委員會之院部長及委員長，由汪派人員充當」(521ページ)。いささか強引といえる手段がとられたのもこうした密約があったればこそなのかもしれない。
- 15) 李鏗・汪瑞燭・趙令揚前掲編註書，267ページ。
- 16) これは顧孟餘の助言に汪が従ったものという（岡少華『汪精衛傳』吉林文史出版社 1988年 116ページ）。
- 17) その証拠の一つは『時事新報』（1931年11月26日）に掲載された記事の「在蔡張陳三先生來到廣州以前，和平解決毫無希望」（查建瑜前掲編所収 501ページ）という一節であり，もう一つは，陳公博によれば帰国した10月はじめには蔣汪合作はほとんど決まっていたという記述である（李鏗・汪瑞燭・趙令揚前掲編註書 266ページ）。
- 18) 前掲『蔣總統秘錄 第八冊』の「下野」についての記述を見ると，当初はその用意があったようであるが（113ページ），上海和平会議のときは下野反対を強く主張したと言っている（115ページ）。
- 19) 查建瑜前掲編「1981年10月22日，汪精衛起草会谈纪要」，482～483ページ。
- 20) 既に〔1〕の注13で引用した蘇維初の結論はそのようである（op. cit., pp.205—206）。

## む す び

本稿は1931年から1932年にかけて汪精衛がその政治的立場を何故に「反蔣運動」から「蔣汪合作」へと大きく変えてきたのかを検討しようとしたものである。

反蔣から蔣汪合作への変更は、1930年の北平拡大会議と翌31年の広州非常会議という2回に及ぶ反蔣大連合の結成と1931年の九・一八事変勃発とを抜きにしてはありえないことだった。したがって反蔣大連合の実現に注目して、〔1〕では1931年に2回目の反蔣大連合が広州非常会議として何故に実現したかを検討した。〔2〕では、広州非常会議が九・一八事変の勃発とともに何故に崩壊し、「蔣汪合作」が何故に実現したかについて考察した。

まず、〔1〕、〔2〕の要点を概略しておこう。

〔1〕では、第2回反蔣大連合である広州非常会議が何故に実現したのかを検討した。

まず第2回反蔣大連合実現のきっかけは、北平拡大会議で約法が制定されたことに端を発して南京政府内部で蔣介石と胡漢民との対立が起き、南京政府が独自に約法を制定することに反対する胡が蔣によって幽閉された事件であった。胡幽閉に反発して南京政府を辞職した元老たちと広州の陳齊業とが結集し、それに汪精衛が加わる形でこの反蔣大連合は実現するのである。したがって胡漢民釈放が第2回反蔣大連合の主要目標であったことは疑いない。次に、この大連合において汪精衛にあてがわれた役は蔣介石に対抗するためのいわば飾り物にすぎなかったことが指摘できる。なぜなら、広州を牛耳っていたのは胡漢民周辺の元右派であったので、元左派の汪精衛は招いても、その手足ともいうべき陳公博ら旧改組派の有力指導

## 汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

者たちが参加するのを拒否していることからしても、汪の自由な活動を嫌っていることは明白だったからである。汪にしても、これでは政府常務委員に推されたとはいえ、憤懣やるかたなかったわけである。こうした中で九・一八事変が起きるのである。

〔2〕では九・一八事変の勃発によって何故に蔣汪合作が実現したのかを検討した。

まず第一に九・一八事変によって蒋介石がそれまでの強硬な態度を一変させたことが指摘できるであろう。蒋介石は胡漢民を釈放したばかりでなく、汪精衛の年来の主張であった国民政府の民主的な制度改革をも受け入れたのである。しかも、蒋介石と汪精衛との間では蔣が軍事を、汪が政治と外交をそれぞれ担当するという取引も成立したようである。したがって、汪精衛は、胡漢民釈放という第2次反蔣大連合の主要目標が達成された以上、この大連合の存在意義も無くなったと見做したのであろう。さらに重要なことは、蒋介石と汪精衛との間で、共産党の反乱という内憂と日本軍の東三省制圧という外患をまのあたりにして国民政府は分裂している場合ではないという現状認識で一致し、当面は、対外戦争よりも「剿共戦」を優先するという戦略（「安内擾外」）で合意ができたことであろう。

要約すれば、九・一八事変当時の現状認識とその後の戦略とで見解が一致し、しかも蒋介石が軍事を、汪精衛が政治と外交を担当する（具体的には行政院長のポストを譲る）という「約束」ができたことが汪精衛は蒋介石との合作を決意することになったということである。

次に、その後の展開を考慮しながら、この蔣汪合作の意義について2、3のコメントを付け加えておきたい。

第1に、対外戦争よりも「剿共戦」を優先する（「安内擾外」）という戦略が、それ以後、1936年の西安事件まで汪精衛と蒋介石との間で一致を見ていたと言えることである。つまりこの蔣汪合作体制の成立によって、こ



### 汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

れまで続いていた国民党の内訌がひとまず終息し、以後、国内統一が進んでいくことを軽視することはできない。

第2に、蔣介石は確かに主席のシンボル化を認めただけでなく、行政院長のポストを汪精衛に譲り渡したとはいうものの、その後の経過を見てみると、政治的な決定権を譲り渡したというよりも、自分の下した決定の責任を汪に押しつけただけのことであった。これによって汪精衛はその後の対日譲歩政策によって国民の厳しい批判を一身に引き受けることになるが、果たしてそれをどこまで当初から予想していたのかは疑問といつてよいであろう。

最後に、「国共合作」から「分共」へ、「反蔣」から「蔣汪合作」へという戦略の大転換をなしたこの時期の汪精衛を政治家としてどのように評価するか、考えておこう。

まず、「国共合作」から「分共」へ、「反蔣」から「蔣汪合作」へ、これらいずれの政策転換においても、汪精衛は国民党全体の指導者であるという自己認識から一貫して行動していたことを指摘しなければならないであろう。この場合、国民党全体の指導者であるとは三民主義によって自己弁証することを意味し、実際、汪精衛は第1回反蔣大連合ではこうしたイデオロギー論争に勝利を収めたと評価してよいと考えられる。しかし、汪精衛は全党の指導者であるという自己規定にこだわり過ぎて、かえって独自の強固な支持勢力と強力な軍事的背景を確保することに失敗したと言えるのではなかろうか。

前者の支持基盤については改組派が勢力拡大の勢いにあるときに汪が強固なリーダーシップを発揮するのを拒否し、結局、改組派解散に至らしめていることに注目したい。また第2回反蔣大連合では率先して派を無くすれば党は団結できるのだと説いているが、ここからは汪の自派養成に対する無欲恬淡さの姿勢がはっきりと窺えるのである。汪精衛は権力欲の強い

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

政治家だという、よく言われる批判は的外れであるといっているように見える。しかし、汪のこうした「美德」が蔣汪合作以後はかえってマイナスに働いたようである。この間、蔣介石が剿共戦の英雄としてその声望をつとに高め、その勢力も着々と育成していったのに対して、汪は日本に対する屈辱外交の責任者として世論の批判を一身に受ける立場に置かれ、持ち前の雄弁を生かすこともできず、その支持勢力はますます先細りの一途をたどっていったといえるからである。

後者の軍事力について汪精衛は一貫して軽視していた節があるということである。中国では昔から「好鉄不打釘，好人不当兵」といわれるように、兵隊になることには強い嫌悪感があったようである<sup>1)</sup>。しかも、1928年に国民革命の勝利が決定的になった後、国民党は内訌続きで人びとに飽きられ、国民革命のイデオロギーもおそらく新鮮さを失いつつあったかに思われる。このように裸の力がもろにぶつかりあうようになった時、文人はますますいずれかの軍人に頼らざるを得なくなっていたのであり、それゆえ、文人の身の処し方はどうしてもオポチュニストたらざるをえなかったと思われる<sup>2)</sup>。

それにもかかわらず、汪精衛が2回に及ぶ反蔣大連合を率いた際に訴えた主張の内容を検討してみると、汪が単に蔣介石の独裁に反対するというだけではなく、政治制度の民主化をより進めるためにヨーロッパの政治制度をモデルにした政府改革案をも用意していた点を看過してはならないと考えられる。その点からしても、汪精衛は権力欲の強い不定見な政治家であったというよりも、国民政府を民主主義的に政治改革できる可能性を秘めた文人政治家だったと言うのが適切ではないであろうか。

注

1) 例えば、中国人論については今なお第一人者と考えられる林語堂は『我國民・我國民』（新居格訳 豊文書院 1938年）のなかで中国人の性格として特

汪精衛は何故に「反蔣運動」から蔣汪合作に転換したか

に、忍耐、無関心、老獪、平和主義、知足、諧謔、保守主義を挙げ、これらの中の「平和主義」の説明で、この諺を引用している（89～94ページ）。

- 2) 一方、蔣介石はこの時期、自己の権力基盤を強化するために、南京政権に北方軍閥の官僚を大量に取り込んでいったばかりでなく、孫文以来の党、政府、軍の序列をひっくり返し、軍を第一と見做すようになっていたのである（Lloyd E. Eastman, 'Nationalist China during the Nanking Decade 1927-1937' pp. 8-9, in Lloyd E. Eastman and others eds. *The Nationalist China Era during the Nanking Decade 1927-1949*, Cambridge: Cambridge University Press, 1991）。